魅せられて フクオカ

地域全体で子ども育てる

保育園経営の写真家 酒井咲帆（さきほ）さん 42

「みんな、こっち見て」。今月上旬、福岡市中心部からほど近い住宅街にある小さな公園。滑り台の上でカメラを構えた写真家の酒井咲帆さん(42)が呼びかけると、近隣住民や保育園児ら約60人が笑顔で集合写真に納まった。

公園は、同市中央区薬院伊福町の「古小烏（ふるこがらす）公園」。この日は、朝から毎月恒例のラジオ体操があり、園児たちが一緒に体操し、駆け回った。その後、卒園が近い園児があいさつすると、参加者らは拍手で祝った。

酒井さんは、福岡市の制度に基づいて公園を管理するボランティア団体の会長で、隣接する「いふくまち保育園」の園長でもある。公園と保育園の一体的な活用によるまちづくりで、人が集う居場所づくりに取り組み、地域全体で子どもを育てることを目指している。

酒井さんは高校卒業後、大阪のギャラリーで働きながら専門学校でカメラの技術を学んだ。2001年頃に旅の途中で立ち寄った富山県氷見市で、カメラを向けた子どもたちとの交流が始まり、約10年間にわたって子どもたちの成長や街の変化を撮り続けた。

子どもの居場所づくりに興味があり、九州大の研究者らとも一緒に活動。富山県での交流を知った研究者から「大学のプロジェクトに参加しないか」と誘われ、06年に福岡市へ移住した。居場所づくりのプロジェクトに3年間携わる中、まちづくりへの関心も高まった。「出会いを重ね、福岡に根付いていった。素直に住みたいと感じた」。そのまま福岡に住み続け、09年4月に写真館を開いた。

保育園の開設は、15年の自身の出産がきっかけだった。応募して4度目で決まった保育園は自宅から自転車で約30分の距離があり、「一緒に子育てをしている」という満足感も足りなかった。「だったら、自分でまちに開かれた保育園を作ってみよう」と考えた。

その時に思いついた場所が、送迎の際に通っていた古小烏公園だった。隣に空き物件があり、一体的な活用ができそうだった。住宅街という立地も良く、公園に立ってみると、「カメラマンとしての経験が生き、園児や住民でにぎわう風景が浮かんだ」という。認可保育所と同水準の助成金を国から受けられる企業主導型保育所の制度が始まったことも後押しとなり、写真館の運営会社を母体として18年、いふくまち保育園を開園した。

定員19人の小さな保育園に中庭はないが、室内と公園とをつなぐ入り口があり、園児は公園の遊具で遊んだり、駆け回ったりする。また、酒井さんらは公園に花を植えて畑やコンポストも設置。かつては草が伸び放題だった場所は、園児の遊び声に誘われて住民や親子が自由に出入りする憩いの場となり、今では研究者らが視察に訪れるなど注目を集めている。

一方、地域の支援も広がっている。保育園が手狭となった21年、近くに「ごしょがだに保育園（定員30人）」を開設。実は、ラジオ体操で知り合った御所ヶ谷町内会長の伊東まち子さん(73)が管理する物件で、開園が決まるまでの1年間、物件を空けて待ってくれていた。伊東さんは「酒井さんらのおかげで人が集まる素晴らしい空間になった」と話す。

「成功だけでなく失敗もあって大変だけど、それも楽しい。ハプニングも思い出になり、皆の人生の糧になるはず」と酒井さん。今後は、介護施設の設立も目指しており、「いろんな問題を自分のこととして考え、まちと一緒に育ち合っていきたい」と笑顔で話した。

（篠原太）

集合写真の撮影のため、滑り台の上で声かけする酒井さん（右）

兵庫 から 福岡へ

兵庫県明石市出身。小学3年生と保育園年長の2児の母。休日は、子どもたちと山登りやピクニック、キャンプなどを楽しむ。福岡に来てから明太子をよく食べるようになった。研究者らと一般社団法人「福祉とデザイン」を設立。子どもが自らの意見や希望を表明するのを、第三者が手助けしたり、代弁したりする「子どもアドボカシー」にも取り組んでいる。

福岡お気に入り Favorite Fukuoka BEST3

1. 子どもと一緒に登りたい低山がある
2. 子どもを真ん中につながる人の温かさ
3. いふくまち、ごしょがだに両保育園の給食

酒井さんが古小烏公園で撮影した住民や保育園児らの集合写真（本人提供）